Osaka University Knowledge Archive

Title	樋口一葉と「七書」
Author(s)	山根, 賢吉
Citation	語文. 1988, 50, p. 17-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68776
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

樋口一葉と「七書」

山根賢吉

「いでや是れより糊口的文学の道をかへてうきよを十露盤の玉の汗に商ひといふ事はじめばや」（「にっ記」明治二十六年七月）と志した一葉が、下谷竜泉寺町に転居した頃、吉原は玉菊の燈籠で賑わっていた。夜になると、茶屋町通りを通って吉原へ向かう車は「十分間に七十五輛」という盛況であった。そういう状況の中で、一葉は日記「塵の中」に次のように書きつけている。

八月一日　晴れ　芦沢今朝ならしのより帰京せしよしにて訪ひ来る　中之町の燈籠今宵より又人形に改まるよしにて門すぐる車又おびただし　母君散歩ながら見に行　我れは七書をよむ

喧噪をきわめる人力車の音を耳にしながら、一葉は「七書」を読んでいたのである。言うまでもなく「七書」とは、『孫子』『呉子』『司馬法』『尉繚子』『六韜』『三略』『李衛公問対』の七種の中国の兵書である。なぜこの時点で一葉が、あえて兵書を読んでいたのであろうか。武士の娘として育てられた一葉が、兵書に心ひかれるのは当然としても、商売と兵書とは直接につながるものではない。筆者には、はからずも現代の企業家が『孫子』に注目している姿と、この時の一葉の姿とがダブって見えてくる。たかが荒物・駄菓子の店とは言え、開業をひかえて、商売については全く経験のない一葉が、兵書を繙くに至ったとしても、さして疑問視するに当らぬとも言える。言わば一葉は現代企業家のハシリとして兵書に注目したとも言えようか。しかし一葉と兵書とは、より深いところで結びついていたとも言えるのではないか。それは商売を含めて、彼女の今後の生き方の指標を求めようとする願いが、こめられていたのではなかろうか。

一葉が店を開いたのは、八月六日のことである。その後

物馴れぬほどのをかしさは五厘の客に一銭のものをうり一銭の客に八厘のものを出すなど跡にてしらぶればあきれたる事をのみなすものぞかし　（八月九日）

此頃の売高多き時は六十銭にあまり少なしとても四十銭を下る事はまれ也　されど大方は五厘六厘の客なるから一日に百人の客をせざることなし　身の忙しさかくてしるべし　（九月二十一日）

と記しているように、武士の商法の滑稽さ、零細業の多忙さにまぎれて、兵書との関連をもの語るものはない。ただ十一月十五日、久しぶりに中島歌子を訪問した記事の中に、

たとへば魚の水における如く何故ともしらず愉々快々に半日を暮しぬ

とある中の「魚の水における如く」という比喩は、『三略』の「下略」に

夫人之在道、若魚之在水、得水而生、失水而死

に類似している。しかし、これは他に用例（例えば『三国志』『唐書』など）があり、一種の成語とも言えるので、必ずしも『三略』に拠ったとは断言できない。

兵書の影響がはっきり認められるのは、「塵之中日記」（二十七年三月）の前書きである。そこには次のように記されている。

天地の誠は虚無のほかにあるべからずといへども人世の誠は道徳仁義のほかにあらず　これをたつとんでかれをすつるは愚也かれを取りてこれに背もいまだし　虚は空にして実は存す　無はうらにして有は表也　四時の順環日月の出入うきよはひとりゆかず　天地はひとり存せず　（中略）　一時の勇はいまだ勇といふべからず　一人の敵とさしちがへたらんは一軍にいか斗のこうかはあらん　一を以て十にあたるはいまだし　万人の敵にあたるはかの孫呉の兵法にあらずや　奇正此内にあり　変化運用の妙天地をつゝんでしかも天地のゝりをはなれず　これをしるものは偉大の人傑となりこれをうしなふものは名もなき狂者となる。

ここに「一を以て十にあたるはいまだし　万人の敵にあたるはかの孫呉の兵法にあらずや」と明記している。しかしこれに一致する語句は『孫子』にも『呉子』にも見当らない。「一を以て十にあたる」は、あるいは『孫子』（虚実篇第六）の

我専為一、敵分為十、是以十攻其一也

または同書（地形篇第十）の

夫勢均以一擊十　曰走

によるかと思われるが、荻生徂徠は前者については

専なると分るゝとの得失を云へるなり、我専一なれば、人数をも分けず始めのまゝなるゆへ、いつもひとつにて居るなり、敵は人数を分る時は、一つの物を分けて十にするなり、是はあながちに人数を十にわくると云ことには非ず、（『孫子国字解』）

と述べ、後者については、

勢均と云は、将の智謀も敵味方同じ位なり、兵の剛臆も敵味方同じ位なり、天の時地の利兵糧の多少も敵味方同じ位なるを云なり、以一撃十とは、右の如く一切のこと何もかも敵味方同じ位なるに、十分の一の人数を以て、十総倍の敵へ取りかくるを云なり、曰走とは、右の如なる時は、必戦に及ばずして味方敗北すべきなり（前掲書）

と述べているように、一葉の言う、一対十ということを述べたのではなく、むしろその逆であって、一葉のことばは見当外れというほかはない。まして「万人の敵にあたる」というようなことは述べるはずがない。あえて推測すれば『孫子』（九地篇第十一）の

犯三軍衆、若使一人

あたりを、読み誤ったのではなかろうか。この「犯」は、徂徠の言うように、「用るとよむ」ところで、「三軍の大勢も一人を使ふ如なりと云意」である。

一葉にとって、恐らく中国の兵書は難解だったであろう。一葉の理解が誤っているとしても、彼女はそのように兵法を受けとってい

たのである。

また、先の文中の「奇正」という語は、野口碩氏の指摘されているように、「兵法の用語。奇兵と正兵」（『全集　樋口一葉　第三巻日記』脚注）である。一、二例をあげれば、

三軍之衆、可使必受敵而無敗者、奇正是也

凡戦者、以正合、以奇勝、故善出奇者、無窮如天地、不竭如江河（中略）奇正相生、如循環之無端、郭能窮之

と、『孫子』（勢篇第五）に見える。しかし一葉はこれを「奇兵と正兵」とは解さなかったようで、むしろ「奇法と正法」程度の意にとっているようである。

「変化運用の妙」以下の文章には、右に引いた『孫子』の「無窮如天地、不竭如江河」や、『三略』（上略）の

天地神明、与物推移、変動無常　因敵転化

などが、ひびいているかも知れない。

先に引いた一葉の文章は、冒頭から兵書の痕跡をとどめているように思われる。「天地の誠は虚無のほかにあるべからず」とか、「虚は空にして実は存す」とかについては、道教思想の影響が考えられるとともに、『孫子』（虚実篇第六）の

夫兵形象水、水之形、避高而趨下、兵之形避実而撃虚、水因地而制流、兵因敵而制勝、故兵無常勢、水無常形

とある一節の「虚」と「実」、また「人世の誠は道徳仁義のほかにあらず」は、儒教思想との関連が考えられるとともに、『六韜』（文韜文師第一）の

太公曰、天下非一人之天下、乃天下之天下也、同天地之利者則得天下、擅天下之利者、則失天下、天有時、地有財、能与人共之者仁也、仁之所在、天下帰之、免人之死、解人之難、救人之患、済人之急者徳也、徳之所在、天下帰、与人同憂同楽、同好同悪者義也、義之所在、天下赴之

とある一節の「仁」「徳」「義」などを、それぞれ、一葉なりに解し、簡略化したとも考えられるのではなかろうか。

また最後の部分に、「四時の順環云々」とあるのは、同年二月二十三日、本郷真砂町に久佐賀義孝を訪問した折の談話、とりわけ久佐賀の「憂の大きに身にかゝるは日々の運用よろしからざるによる」（「日記ちりの中」）などの発言に啓発されたものであろう。一葉も久佐賀宛書簡の中で「四季活用の御物がたりは一々敬服申上候へども云々」と記している。ただし、表記は相違するものの、「循環」という語が先に引用した『孫子』（勢篇第五）にも見える。

一葉が閉店を決意したのは、明治二十七年三月下旬と推定されるが、その前後の一葉の行動には異常と言えるものがある。その一つが久佐賀訪問で、目的は閉店後の金策のためと考えられるが、何の面識もなく、誰の紹介もなく借金を依頼しようとは、以前の一葉からは考えられない行動である。それは切羽つまっての行動であったろうし、事実、一葉は久佐賀と対面の際

我れはまことに窮鳥の飛入るべきふところなくして宇宙にさまよふ身に待る　あはれ広き御むねはうちにやどるべきとまり木もや　（「日記ちりの中」）

と語っている。これは筑摩書房版『樋口一葉全集　第三巻（上）』の脚注にあるように、『顔氏家訓』（省事）の

窮鳥入懐、仁人所憫、況死士帰我当弃之乎

あるいは、諺「窮鳥懐に入れば猟師も殺さず」をふまえたものであ

るが、『尉繚子』（武議第八）の中にも

鷙鳥逐雀、有襲人之懐、入人之室者、非出生也、後有憚也

と類似の表現がある。もっとも、一葉の表現が『顔氏家訓』ないし諺に近いことは言うまでもない。

一葉が久佐賀訪問を決意したこと、その後一年余に及ぶ久佐賀との交渉の経緯は、『孫子』冒頭の計篇にある。

兵者詭道也、故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、乱而取之、実而備之、強而避之、怒而撓之、卑而驕之、佚而労之、親而離之、攻其無備、出其不意、此兵家之勝、不可先伝也

から学んだものではなかろうか。「兵者詭道也」とする『孫子』を、一葉は処生の法も所詮「詭道」であると考え、「貧者一銭の余裕なく」して、「秋月」と偽名を使って、「相場といふこと為して見ばや」と忽然と久佐賀の前に現れたのではないか。久佐賀からの二月二十八日の観梅の誘いにも、「よしや袂にあまる梅がかはここに縁なくとも御厚意のほど月とも花とも味ひ可申御詞にあまへ不日御ひざもとにまかり出づべく候まゝ御見すてなく願上まゐらせ候」（書簡）と謝絶しているが、これは「能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近」の法による謝絶状ではないか。また、六月初旬、久佐賀より「いでやその一身をこゝもとにゆだね給はらずやと厭ふべき文の来」た時にも、「われを女と見てあやしき筋になど思し給はらばむしろ一言にてことはり給はんにはしかず」（「水の上日記」）と拒絶しているが、これまた『孫子』の「利而誘之」「親而離之」の方法ではなかろうか。言うまでもなく、『孫子』は「七書」の最初に置かれるのが常であり、しかもその冒頭の「計篇第一」を一葉が読まなかったはずはない。筆者は一葉の久佐賀との微妙なかけ引きが、『孫子』の兵法の応用ではなかったかと思うのである。

また、一葉が「塵中につ記」（明治二十七年三月）の前書きの中で、

わがこゝろざしは国家の大本にあり

と書いているのは、まさに『孫子』（計篇）冒頭の

孫子曰、兵者国之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也

あるいは『三略』（上略）の

英雄者国之幹、庶民者国之本

あたりに拠っているのではないか。一葉は同じ文章の中で「死生いとはず」とも記している。一葉の言う「国家の大本」は、具体的な像を結ばぬまま消滅して行ったようである。

丸山福山町に転居後間もなくの六月四日、

団子坂より藪下を過ぎて根津神社の坂にかゝる　のぼり口の左手にさゝやかなる枝折戸して黒木の楷段かう〳〵しくふりたる庵の有けり　二十二宮人丸とかきたる文字も故ありげなるに邦子は常にかゝる方をあやしきものにいひくたせばひたすらにこれを笑ふ

と、妹に笑われながらも、翌日、一葉はこの二十二宮人丸を訪問している。

五日　かの人丸の異様成しがこゝろにかゝればかかる処に又おもしろき人もやとてその庵を訪ふ　異談一ならず物語をかしかりき　人はいくつ斗にや　髪ながく髯しろくなへばみたる小袖の長やかなるを着たり　家は三間なれど天井もなくくりやめく物もなし　雨戸といふ物一ひらもなく雨風はいかにしのぐらんあやし　七八年を遊歴に送りてこの庵へはをとゝし斗よりとき

く　訪人ありとても我が厭ふべきには逢はずとて門にそのよし
かひしるしあるもさのみはいかでとをかし

と、異様の蓮門教宮司を訪問したのは、「埋もれたるむぐらの中に共にかたるべき人もや」と考えたからである。しかし、久佐賀にしても人丸にしても「浅はかな小さきのぞみを持ちて唯めの前の分厘にのみまよふ」俗物に過ぎず、やがて一葉は

かゝるともがらと大事を談じたらんはおさな子にむかひて天を論ずるが如く労して遂に益なかるべし　おもへば我れも敵をしらざるのはなはだしさよ

と自嘲せざるを得なくなる。ここに「敵」という語が用いられていることも兵書との関連を思わせるが、異様の人物に心ひかれ、あえて訪問した一葉の念頭には、「七書」の一つ『六韜』で、周の文王が太公望を訪問して天下を論じたことが念頭にあったのではないかとも思われる（ただし、この故事が他書にも見えることは周知の通りである）。

一葉が「七書」を読んでいたという記事は、最初にあげた明治二十六年八月一日のみである。彼女がどの程度漢籍が読めたかはさだかではないが、「史記」や漢詩などの抜書きを残していることから、かなり関心は持っていたものと思われる。しかし、以上述べたように「七書」を十分に理解するには至らなかったと見るべきで、そのところどころを、彼女なりに解し、それを処世法として活用したとは言えるであろう。特に閉店を決意し、背水の陣を敷いた一葉にとって、「七書」は彼女に異常な行動をとらせる一因となっているように思われる。

八月一日に「七書」を読んでいた一葉も、三日には妹とともに玉菊の燈籠見物に出かけている。

日くれてより国子共に燈籠見にゆく　人形に変りける景況を見んとてなり　帰路雨になる

人形は安本亀八及び門弟などの作なるべし　東京名所成けり

とある。この「安本亀八」については、現在なお、まともな注がないと言ってよいが、初代安本亀八は、文政九年（一八二六）熊本に生れ、明治初年、大阪に滞在、明治八年上京、その子、二代目亀八（安政四年生）、三代目亀八（明治元年生）とともに、浅草馬道に住み、親子三人で「鹿児島戦争実記」などの生人形を作って人気を博し、明治二十年代はその全盛期であった。初代は明治三十三年（一九〇〇）、二代目はその前年に、いずれも東京で没し、三代目は昭和二十一年（一九四六）、長野県で没し、三人とも世田谷の幸竜寺に葬られていること、また彼等の作品が相当数現存することなど、『生人形師　安本亀八』（冨森盛一著、昭和五十一年十一月　名張青年会議所発行）によって知られる。「七書」とは関係ないが、一葉日記注釈の欠落を補うものとして紹介しておきたい。

—甲南女子大学教授—